


関係各位

山口市長 伊藤 和貴

## 第27回中原中也賞の発表

受賞詩集	たましいの移動				
著者名	國松 絵梨				
出版社	七月堂	刊行年月日 2021年8月10日			
著者の住所 神奈川県	出身地 東京・シカゴ・神奈川・香港				
年齢	24歳	生年月日	平成9（1997）年3月2日		
性別	女	職業	大学院生	最終学歴	慶應義塾大学大学院 文学研究科在学中
《コメント》					
<p>この度は素晴らしい賞に選んでいただきありがとうございます。</p> <p>私は自分の発している言葉が誰かに届きうるという確信が持てないままだったので、この詩集を出してみ、いろいろな人がいろいろなことを言ってくれたことが本当にうれしかったです。まずは読んでくださった皆さまに、そして応援してくれた友人、先生方、七月堂の皆さまにも心より感謝申し上げます。</p> <p>何よりこの機会を与えてくださった先生方に感謝をしたいと思います。先生方の授業をとってなければ、私は、詩を書いてもいいということに一生気づかずにいたかもしれません。なんとか、私が詩からもらったものを、詩という営みそれ自体に還元していきたいです。この詩集は誰にとっても何かしらあるようにと考えながらつくりました。読んだことをきっかけに、詩を書いてみようと思う人がいたらうれしいです。</p>					
《選考経過》					
<p>公募、推薦の詩集218点について本年1月に開催された推薦会の検討の結果、<sup>くにまつえり</sup>國松絵梨『たましいの移動』、<sup>いどう</sup>小林埜埜『<sup>こばやしかんか</sup>小松川叙景』、<sup>こまつがわじょけい</sup>紫衣『<sup>しい</sup>旋律になる前<small>の</small>』、<sup>せんりつ</sup>蜷シモーヌ『<sup>しじみ</sup>なんかでてるとてもでてる』、<sup>てるともじ</sup>照井知二『<sup>なつ</sup>夏の砦』、<sup>なつ</sup>長谷部裕嗣『<sup>とりで</sup>灰には灰を』、<sup>はせべひろし</sup>村岡由梨『<sup>はい</sup>眠れる花』の7冊が選ばれ、本日の選考会の対象とされた。</p> <p>最終的に討議の対象となったのは、蜷シモーヌ『なんかでてるとてもでてる』と國松絵梨『たましいの移動』の2冊だった。蜷シモーヌ詩集は、言葉の発声を基盤としながら、それを文字表記の次元でどのような問題を派生させるのかを迫りかけた作品。國松詩集は現在の若者がこの世界を取り扱うとき、健康的で最も素直な報告とも言える作品。どちらも第一詩集だが、どちらが受賞してもいい、という意見が多く、選考会では1冊に絞りきるまで時間がかかった。蜷シモーヌ詩集は、技術的にたいへん高度な力量を見せているが、読者を置き去りにするような嫌いがあることが難点。その点、國松詩集が持つ構成力は、読者を次第に、自分にも書ける、と思わせるような広がりがある。自らを途中経過とした自覚と今後の可能性に期待して、中原中也賞に決定した。</p>					
<p>選考委員：<sup>あらかわようじ</sup>荒川洋治、<sup>いさかようこ</sup>井坂洋子、<sup>ささきみきろう</sup>佐々木幹郎、<sup>たかはしげんいちろう</sup>高橋源一郎、<sup>はちかいみみ</sup>蜂飼耳（50音順・敬称略）</p>					

《山口市長コメント》

第27回中原中也賞が、國松絵梨さんの詩集『たましいの移動』に決定しましたことを、心からお祝い申し上げます。

この度受賞されました國松絵梨さんが、今回の受賞を契機に尚一層、活躍の場を広げられ、さらなる飛躍をされますよう心から御期待申し上げます。今後とも多くの方が、日本の近代詩史に偉大な足跡を残した本市出身の中原中也の業績を顕彰するこの賞をひとつの目標として創作活動に励んでいただければ幸いです。

令和4年2月19日 山口市長 伊藤和貴

※受賞者の年齢は、R4.2.19現在